魔術

芥川龍之介

　ある時雨（しぐれ）の降る晩のことです。私（わたし）を乗せた人力車（じんりきしゃ）は、何度も大森界隈（おおもりかいわい）の険（けわ）しい坂を上ったり下りたりして、やっと竹藪（たけやぶ）に囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒（かじぼう）を下しました。もう鼠色のペンキの剥（は）げかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯（ちょうちん）の明りで見ると、印度（インド）人マティラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札（ひょうさつ）がかかっています。

　マティラム・ミスラ君と云えば、もう皆さんの中にも、御存じの方が少くないかも知れません。ミスラ君は永年印度の独立を計っているカルカッタ生れの愛国者で、同時にまたハッサン・カンという名高い婆羅門（ばらもん）

の秘法を学んだ、年の若い魔術(まじゅつ)の大家なのです。私はちょうど一月ばかり以前から、ある友人の紹介でミスラ君と交際していましたが、政治経済の問題などはいろいろ議論したことがあっても、肝腎(かんじん)の魔術を使う時には、まだ一度も居合せたことがありません。そこで今夜は前以て、魔術を使って見せてくれるように、手紙で頼んで置いてから、当時ミスラ君の住んでいた、寂しい大森の町はずれまで、人力車を急がせて来たのです。

　私は雨に濡れながら、覚束(おぼつか)ない車夫の提灯の明りを便りにその標札の下にある呼鈴(よびりん)の釦(ボタン)を押しました。

すると間もなく戸が開(あ)いて、玄関へ顔を出したのは、ミスラ君の世話をしている、背の低い日本人の御婆さんです。

「ミスラ君は御出でですか。」

「いらっしゃいます。先ほどからあなた様を御待ち兼ねでございました。」

御婆さんは愛想(あいそ)よくこう言いながら、すぐその玄関のつきあたりにある、ミスラ君の部屋へ私を案内しました。

「今晩は、雨の降るのによく御出ででした。」

色のまっ黒な、眼の大きい、柔(やわらか)な口髭(くちひげ)のあるミス

ラ君は、テエブルの上にある石油ランプの心を撚りながら、元気よく私に挨拶しました。
「いや、あなたの魔術さえ拝見出来れば、雨くらいは何ともありません。」
私は椅子に腰かけてから、うす暗い石油ランプの光に照された、陰気な部屋の中を見廻しました。
ミスラ君の部屋は質素な西洋間で、まん中にテエブルが一つ、壁側に手ごろな書棚が一つ、それから窓の前に机が一つ――ほかにはただ我々の腰をかける、椅子が並んでいるだけです。しかもその椅子や机が、みんな古ぼけた物ばかりで、縁へ赤く花模様を織り出し

た、派手（はで）なテエブル掛でさえ、今にもずたずたに裂けるかと思うほど、糸目が露（あらわ）になっていました。

私たちは挨拶をすませてから、しばらくは外の竹藪に降る雨の音を聞くともなく聞いていましたが、やがてまたあの召使いの御婆さんが、紅茶の道具を持ってはいって来ると、ミスラ君は葉巻（はまき）の箱の蓋（ふた）を開けて、

「どうです。一本。」と勧（すす）めてくれました。

「難有（ありがと）う。」

私は遠慮（えんりょ）なく葉巻を一本取って、燐寸（マッチ）の火をうつしながら、

「確かあなたの御使いになる精霊（せいれい）は、ジンとかいう名

前でしたね。するとこれから私が拝見する魔術と言うのも、そのジンの力を借りてなさるのですか。」

ミスラ君は自分も葉巻へ火をつけると、にやにや笑いながら、匂（におい）の好い煙を吐いて、

「ジンなどという精霊があると思ったのは、もう何百年も昔のことです。アラビヤ夜話（やわ）の時代のことでも言いましょうか。私がハッサン・カンから学んだ魔術は、あなたでも使おうと思えば使えますよ。高が進歩した催眠術（さいみんじゅつ）に過ぎないのですから。――御覧なさい。この手をただ、こうしさえすれば好いのです。」

ミスラ君は手を挙げて、二三度私の眼の前へ三角形

のようなものを描きましたが、やがてその手をテエブルの上へやると、縁へ赤く織り出した模様の花をつまみ上げました。私はびっくりして、思わず椅子（いす）をずりよせながら、よくよくその花を眺めましたが、確かにそれは今の今まで、テエブル掛の中にあった花模様の一つに違いありません。が、ミスラ君がその花を私の鼻の先へ持って来ると、ちょうど麝香（じゃこう）か何かのように重苦しい匂さえするのです。私はあまりの不思議さに、何度も感嘆（かんたん）の声を洩（もら）しますと、ミスラ君はやはり微笑したまま、また無造作（むぞうさ）にその花をテエブル掛の上へ落しました。勿論落すともとの通り花は織り出した模様

になって、つまみ上げること所か、花びら一つ自由には動かせなくなってしまうのです。訳はないでしょう。今度は、このランプを御覧なさい。」

ミスラ君はこう言いながら、ちょいとテエブルの上のランプを置き直しましたが、その拍子にどういう訳か、ランプはまるで独楽のように、ぐるぐる廻り始めました。それもちゃんと一所に止ったまま、ホヤを心棒のようにして、勢いよく廻り始めたのです。初の内は私も胆をつぶして、万一火事にでもなっては大変だと、何度もひやひやしましたが、ミスラ君は静に紅茶を飲みながら、一向騒ぐ容子もありません。そこ

で私もしまいには、すっかり度胸が据（すわ）ってしまって、だんだん早くなるランプの運動を、眼も離さず眺めていました。

また実際ランプの蓋（かさ）が風を起して廻る中に、黄いろい焔（ほのお）がたった一つ、瞬（またた）きもせずにともっているのは、何とも言えず美しい、不思議な見物（みもの）だったのです。が、その内にランプの廻るのが、いよいよ速（すみやか）になって行って、とうとう廻っているとは見えないほど、澄み渡ったと思いますと、いつの間（ま）にか、前のようにホヤ一つ歪（ゆが）んだ気色（けしき）もなく、テエブルの上に据っていました。

「驚きましたか。こんなことはほんの子供瞞しですよ。それともあなたが御望みなら、もう一つ何か御覧に入れましょう。」

ミスラ君は後を振返って、壁側の書棚を眺めましたが、やがてその方へ手をさし伸ばして、招くように指を動かすと、今度は書棚に並んでいた書物が一冊ずつ動き出して、自然にテエブルの上まで飛んで来ました。そのまた飛び方が両方へ表紙を開いて、夏の夕方に飛び交う蝙蝠のように、ひらひらと宙へ舞上るのです。私は葉巻を口へ啣えたまま、呆気にとられて見ていましたが、書物はうす暗いランプの光の中に何冊も

自由に飛び廻って、一々行儀よくテエブルの上へピラミッド形に積み上りました。しかも残らずこちらへ移ってしまったと思うと、すぐに最初来たのから動き出して、もとの書棚へ順々に飛び還(かえ)って行くじゃありませんか。

が、中でも一番面白かったのは、うすい仮綴(かりとじ)の書物が一冊、やはり翼のように表紙を開いて、ふわりと空へ上りましたが、しばらくテエブルの上で輪を描いてから、急に頁をざわつかせると、逆落(さかおと)しに私の膝へさっと下りて来たことです。どうしたのかと思って手にとって見ると、これは私が一週間ばかり前にミスラ

君へ貸した覚えがある、仏蘭西（フランス）の新しい小説でした。
「永々（ながなが）御本を難有（ありがと）う。」
ミスラ君はまだ微笑を含んだ声で、こう私に礼を言いました。勿論（もちろん）その時はもう多くの書物が、みんなテエブルの上から書棚の中へ舞い戻ってしまっていたのです。私は夢からさめたような心もちで、暫時（ざんじ）は挨拶さえ出来ませんでしたが、その内にさっきミスラ君の言った、「私の魔術などというものは、あなたでも使おうと思えば使えるのです。」という言葉を思い出しましたから、
「いや、兼ね兼ね評判（ひょうばん）はうかがっていましたが、あな

たのお使いなさる魔術が、これほど不思議なものだろうとは、実際、思いもよりませんでした。ところで私のような人間にも、使って使えないことのないと言うのは、御冗談ではないのですか。」

「使えますとも。誰にでも造作（ぞうさ）なく使えます。ただ――」と言いかけてミスラ君はじっと私の顔を眺めながら、いつになく真面目（まじめ）な口調になって、

「ただ、欲のある人間には使えません。ハッサン・カンの魔術を習おうと思ったら、まず欲を捨てることです。あなたにはそれが出来ますか。」

「出来るつもりです。」

私はこう答えましたが、何となく不安な気もしたので、すぐにまた後（あと）から言葉を添えました。

「魔術さえ教えて頂ければ。」

それでもミスラ君は疑わしそうな眼つきを見せましたが、さすがにこの上念を押すのは無躾（ぶしつけ）だとでも思ったのでしょう。やがて大様（おおよう）に頷（うなず）きながら、

「では教えて上げましょう。が、いくら造作なく使えると言っても、習うのには暇もかかりますから、今夜は私の所へ御泊（おとま）りなさい。」

「どうもいろいろ恐れ入ります。」

私は魔術を教えて貰う嬉しさに、何度もミスラ君へ

御礼を言いました。が、ミスラ君はそんなことに頓着(とんちゃく)する気色(けしき)もなく、静に椅子から立上ると、

「御婆サン。御婆サン。今夜ハ御客様ガ御泊リニナルカラ、寝床ノ仕度ヲシテ置イテオクレ。」

私は胸を躍らしながら、葉巻の灰をはたくのも忘れて、まともに石油ランプの光を浴びた、親切そうなミスラ君の顔を思わずじっと見上げました。

× × ×

私がミスラ君に魔術を教わってから、一月ばかりたった後（のち）のことです。これもやはりざあざあ雨の降る晩でしたが、私は銀座のある倶楽部（くらぶ）の一室で、五六人の友人と、暖炉（だんろ）の前へ陣取りながら、気軽な雑談に耽っていました。

何しろここは東京の中心ですから、窓の外に降る雨脚（あまあし）も、しっきりなく往来する自働車や馬車の屋根を濡らすせいか、あの、大森（おおもり）の竹藪にしぶくような、ものさびしい音は聞えません。

勿論窓の内の陽気なことも、明い電燈の光と言い、大きなモロッコ皮の椅子（いす）と言い、あるいはまた滑かに

光っている寄木細工（よせぎざいく）の床（ゆか）と言い、見るから精霊（せいれい）でも出て来そうな、ミスラ君の部屋などとは、まるで比べものにはならないのです。

私たちは葉巻の煙の中に、しばらくは猟（りょう）の話だの競馬の話だのをしていましたが、その内に一人の友人が、吸いさしの葉巻を暖炉（だんろ）の中に抛りこんで、私の方へ振り向きながら、

「君は近頃魔術を使うという評判（ひょうばん）だが、どうだい。今夜は一つ僕たちの前で使って見せてくれないか。」

「好いとも。」

私は椅子の背に頭を靠（もた）せたまま、さも魔術の名人ら

しく、横柄（おうへい）にこう答えました。
「じゃ、何でも君に一任するから、世間の手品師（てじなし）などには出来そうもない、不思議な術を使って見せてくれ給え。」
友人たちは皆賛成だと見えて、てんでに椅子をすり寄せながら、促すように私の方を眺めました。そこで私は徐（おもむろ）に立ち上って、
「よく見ていてくれ給えよ。僕の使う魔術には、種も仕掛（しかけ）もないのだから。」
私はこう言いながら、両手のカフスをまくり上げて、暖炉の中に燃え盛（さか）っている石炭を、無造作（むぞうさ）に掌の上へ

すくい上げました。私を囲んでいた友人たちは、これだけでも、もう荒胆（あらぎも）を挫（ひし）がれたのでしょう。皆顔を見合せながらうっかり側へ寄って火傷（やけど）でもしては大変だと、気味悪るそうにしりごみさえし始めるのです。

　そこで私の方はいよいよ落着き払って、その掌の上の石炭の火を、しばらく一同の眼の前へつきつけてから、今度はそれを勢いよく寄木細工の床（ゆか）へ撒（ま）き散らしました。その途端です、窓の外に降る雨の音を圧して、もう一つ変った雨の音が俄（にわか）に床の上から起ったのは。と言うのはまっ赤な石炭の火が、私の掌（てのひら）を離れると同時に、無数の美しい金貨になって、雨のように床の

上へこぼれ飛んだからなのです。

友人たちは皆夢でも見ているように、茫然と喝采するのさえも忘れていました。

「まずちょいとこんなものさ。」

私は得意の微笑を浮べながら、静にまた元の椅子に腰を下しました。

「こりゃ皆ほんとうの金貨かい。」

呆気にとられていた友人の一人が、ようやくこう私に尋ねたのは、それから五分ばかりたった後のことです。

「ほんとうの金貨さ。嘘だと思ったら、手にとって見

給え。」
「まさか火傷（やけど）をするようなことはあるまいね。」
友人の一人は恐る恐る、床の上の金貨を手にとって見ましたが、
「成程こりゃほんとうの金貨だ。おい、給仕、箒（ほうき）と塵取りとを持って来て、これを皆掃き集めてくれ。」
給仕はすぐに言いつけられた通り、床の上の金貨を掃き集めて、堆（うずたか）く側のテエブルへ盛り上げました。友人たちは皆そのテエブルのまわりを囲みながら、
「ざっと二十万円くらいはありそうだね。」
「いや、もっとありそうだ。華奢（きゃしゃ）なテエブルだった日

には、つぶれてしまうくらいあるじゃないか。」
「何しろ大した魔術を習ったものだ。石炭の火がすぐに金貨になるのだから。」
「これじゃ一週間とたたない内に、岩崎や三井にも負けないような金満家になってしまうだろう。」などと、口々に私の魔術を褒めそやしました。が、私はやはり椅子によりかかったまま、悠然と葉巻の煙を吐いて、
「いや、僕の魔術というやつは、一旦欲心を起したら、二度と使うことが出来ないのだ。だからこの金貨にしても、君たちが見てしまった上は、すぐにまた元の暖炉の中へ抛りこんでしまおうと思っている。」

友人たちは私の言葉を聞くと、言い合せたように、反対し始めました。これだけの大金を元の石炭にしてしまうのは、もったいない話だと言うのです。が、私はミスラ君に約束した手前もありますから、どうしても暖炉に抛りこむと、剛情（ごうじょう）に友人たちと争いました。すると、その友人たちの中でも、一番狡猾（こうかつ）だという評判のあるのが、鼻の先で、せせら笑いながら、

「君はこの金貨を元の石炭にしようと言う。僕たちはまたしたくないと言う。それじゃいつまでたった所で、議論が干（ひ）ないのは当り前だろう。そこで僕が思うには、この金貨を元手にして、君が僕たちと骨牌（かるた）をするのだ。

そうしてもし君が勝ったなら、石炭にするとも何にするとも、自由に君が始末するが好(い)い。が、もし僕たちが勝ったなら、金貨のまま僕たちへ渡し給え。そうすれば御互の申し分も立って、至極満足だろうじゃないか。」

　それでも私はまだ首を振って、容易にその申し出しに賛成しようとはしませんでした。所がその友人は、いよいよ嘲(あざけ)るような笑(えみ)を浮べながら、私とテエブルの上の金貨とを狡(ず)るそうにじろじろ見比べて、

「君が僕たちと骨牌(かるた)をしないのは、つまりその金貨を僕たちに取られたくないと思うからだろう。それなら

魔術を使うために、欲心を捨てたとか何とかいう、折角の君の決心も怪しくなってくる訳じゃないか。」

「いや、何も僕は、この金貨が惜しいから石炭にするのじゃない。」

「それなら骨牌をやり給えな。」

　何度もこういう押問答を繰返した後で、とうとう私はその友人の言葉通り、テエブルの上の金貨を元手に、どうしても骨牌を闘わせなければならない羽目に立ち至りました。勿論友人たちは皆大喜びで、すぐにトランプを一組取り寄せると、部屋の片隅にある骨牌机を囲みながら、まだためらい勝ちな私を早く早くと急き

立てるのです。

ですから私も仕方がなく、しばらくの間は友人たちを相手に、嫌々（いやいや）骨牌（かるた）をしていました。が、どういうものか、その夜に限って、ふだんは格別骨牌（かるた）上手でもない私が、噓のようにどんどん勝つのです。するとまた妙なもので、始は気のりもしなかったのが、だんだん面白くなり始めて、ものの十分とたたない内に、いつか私は一切を忘れて、熱心に骨牌（かるた）を引き始めました。

友人たちは、元より私から、あの金貨を残らず捲（ま）き上げるつもりで、わざわざ骨牌（かるた）を始めたのですから、こうなると皆あせりにあせって、ほとんど血相（けっそう）さえ変

るかと思うほど、夢中になって勝負を争い出しました。が、いくら友人たちが躍起となっても、私は一度も負けないばかりか、とうとうしまいには、あの金貨とほぼ同じほどの金高(きんだか)だけ、私の方が勝ってしまったじゃありませんか。するとさっきの人の悪い友人が、まるで、気違いのような勢いで、私の前に、札(ふだ)をつきつけながら、

「さあ、引き給え。僕は僕の財産をすっかり賭ける。地面も、家作(かさく)も、馬も、自働車も、一つ残らず賭けてしまう。その代り君はあの金貨のほかに、今まで君が勝った金をことごとく賭けるのだ。さあ、引き給え。」

私はこの刹那(せつな)に欲が出ました。テエブルの上に積んである、山のような金貨ばかりか、折角私が勝った金さえ、今度運悪く負けたが最後、皆相手の友人に取られてしまわなければなりません。のみならずこの勝負に勝ちさえすれば、私は向うの全財産を一度に手へ入れることが出来るのです。こんな時に使わなければどこに魔術などを教わった、苦心の甲斐(かい)があるのでしょう。そう思うと私は矢(や)も楯(たて)もたまらなくなって、そっと魔術を使いながら、決闘でもするような勢いで、

「よろしい。まず君から引き給え。」

「九(く)。」

「王様（キング）。」

私は勝ち誇った声を挙げながら、まっ蒼になった相手の眼の前へ、引き当てた札（ふだ）を出して見せました。すると不思議にもその骨牌（かるた）の王様（キング）が、まるで魂がはいったように、冠（かんむり）をかぶった頭を擡（もた）げて、ひょいと札（ふだ）の外へ体を出すと、行儀よく剣を持ったまま、にやりと気味の悪い微笑を浮べて、

「御婆サン。御婆サン。御客様ハ御帰リニナルソウダカラ、寝床ノ仕度ハシナクテモ好イヨ。」

と、聞き覚えのある声で言うのです。と思うと、どういう訳か、窓の外に降る雨脚（あまあし）までが、急にまたあの

大森の竹藪にしぶくような、寂しいざんざ降りの音を立て始めました。

ふと気がついてあたりを見廻すと、私はまだうす暗い石油ランプの光を浴びながら、まるであの骨牌の王様のような微笑を浮べているミスラ君と、向い合って坐っていたのです。

私が指の間に挟んだ葉巻の灰さえ、やはり落ちずにたまっている所を見ても、私が一月ばかりたったと思ったのは、ほんの二三分の間に見た、夢だったのに違いありません。けれどもその二三分の短い間に、私がハッサン・カンの魔術の秘法を習う資格のない人間

だということは、私自身にもミスラ君にも、明かになってしまったのです。私は恥しそうに頭を下げたまま、しばらくは口もきけませんでした。

「私の魔術を使おうと思ったら、まず欲を捨てなければなりません。あなたはそれだけの修業が出来ていないのです。」

ミスラ君は気の毒そうな眼つきをしながら、縁へ赤く花模様を織り出したテエブル掛の上に肘(ひじ)をついて、静にこう私をたしなめました。

（大正八年十一月十日）

底本：「芥川龍之介全集３」ちくま文庫、筑摩書房
　　　１９８６（昭和61）年12月１日第１刷発行
　　　１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
　　　１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：かとうかおり
１９９８年12月８日公開
２００４年３月９日修正

青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。